

谷田 真

Makoto TANIDA

名城大学理工学部建築学科, 准教授, 博士 (工学) (tanida@meijo-u.ac.jp)

Department of Architecture, Meijo University, Associate professor, Dr. Eng.

共働き家庭や一人親家庭の子どもたちが放課後を過ごす学童保育所の実態はあまり知られていない。全国的には利用を希望する児童数に対して施設整備が追いつかない状況である。女性の就労支援の観点から保育所に光が当たる一方で、同じ待機児童問題等を抱えつつも、あまり注目されていないのが学童である。筆者はこの状況を憂い、2014年5月、小生の研究室に所属する学生たちや地元の建築設計事務所とともに、「学童保育の育て方」というワークショップ型プロジェクトをスタートさせた。それら取り組みには、地域防災に通ずるヒントがある。

地域への広がり, 相互理解, DIY, カスタマイズ, 地域活動, 持続可能
Distribution to the region, Mutual understanding, DIY, Customize, Regional activity, Sustainable

1. 活動概要

2014年8月から11月にかけて、名古屋市千種区にある高見学童に通う子どもたち30名ほどを対象に、研究室の学生10数名と設計事務所がサポートするかたちで、全4回のワークショップ「学童ってこんなところ」を実施した。第1回うち・にわ編では、室内や庭で気になる場所やものをポラロイドカメラを使い撮影し、その理由を皆で発表し合った。第2回・第3回のまち編でも、放課後の遊び場や行き帰りの道中で見つけた気になる場所やものを撮影するとともに、大きなマップ上にその写真や理由を貼付け、皆でプレゼンボードを制作した。そして最終となった第4回お披露目編では、第3回までのメンバーに父母や地域の人たち20名ほどが新たに加わった。ここでは、学童に散在する200以上の日常的アイテムをそれぞれフォトシートとして並べ、「好きなもの・残したいもの」、「苦手なもの・いらぬもの」など皆の思いをシールに読み替え、各フォトシートに貼りまくった。さらに、それら思いに重み付けを行い、学生たちが準備した1/10スケールの学童施設模型にマーキングを施していくことで、アイテムと空間の関係性を可視化させた。また、子どもたちの日常の活動範囲が見

渡せる、大きなまちの航空写真を準備し、気になる場所に理由が書かれた旗を立ててもらうことで、立体的なオリジナルマップも制作した。この一連のワークショップを通して、学童が物語を持つ多くの日用品に囲まれた豊かな生活空間であること、学童周辺に広がるさまざまな環境要素を駆使し、地域の一員として日常を過ごしていることを皆で共有できたと考えている。

2. ソフト的観点

2014年7月、政府により打ち出された「放課後子ども総合プラン」では、放課後の子どもたちを受け入れる施設の8割を、学校内の空き教室を活用することで賄う指針が示されている。名古屋市でも、空き教室を利用した「トワイライトスクール」や「トワイライトルーム」などを独自に整備してきた経緯をもつが、ソフト面に目を向けると、宿題指導や工作・実験教室など「学習・体験活動の場」としての要素が強く、「生活の場」としての意味合いが強い学童とは、大きく性格を異にする。筆者は、学童の育み方を模索する上で、この「生活の場」としてのあり方をソフト・ハード両面から最大限に引き出すことに、ひとつのヒントがあると考えている。また、父母

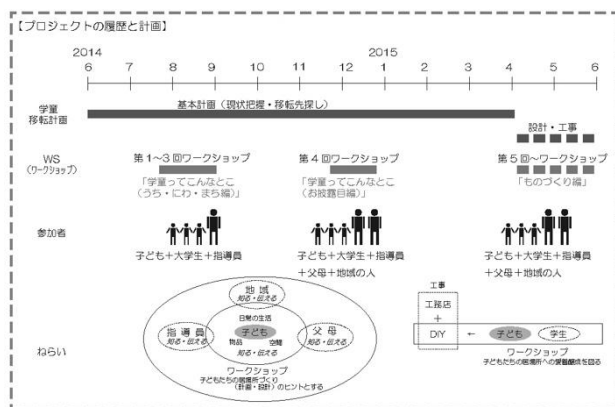


Fig. 1 プロジェクトのプロセスと概要



Photo1 フィールドワークを通して日常生活の場を考える

らによって運営される学童は、親同士はもちろん、地域や役所のひとたちとの繋がりを醸成させるシステムとしても重要である。

3. ハード的観点

子どもたちが放課後を過ごす学童保育所は、学習活動が主な目的である学校とは異なり、生活活動が営まれる場所としてのあり方が問われる。本プロジェクトは、このポリシーを模索することが目的である。

研究室の修士学生らと行った空間利用の実態調査では、多くの学童で改修事例を集めることができた。その特徴は「境界の取り扱い方」に現れ、半透明素材で新たな壁を設け保育室を細分化したり、壁の一部を撤去し視線の抜けをつくりだしたりする工夫が見られた。また、どの学童も収納や壁面のスペースが十分ではなく、物品の整理や紙類の掲示には苦心していた。日常の中で徐々に溜まっていく物品類を合理的に整理整頓できる秀逸な家具類がデザインできれば、空間の有効活用になり、結果的に子どもたちの新たな居場所を獲得することにもつながると感じた。

2014年9月から2ヶ月ほど、研究室は名古屋市西区で学童の改修工事に取り組んだ。それは、庄内学区にある学童が耐震強度不足により移転に迫られたことを機に、隣接する稲生学区に新規で学童を開所し、おおよそ半数の子どもたちをそこへ移すというもの。学童利用が許された民家を既に確保していたものの、学童仕様への改修に向けて手をこまねいていたところで、研究室に声が掛かった。当初我々は、この取り組みに子どもたちを巻き込みたいと考えたが、短い工期のため段取りが間に合わず、計画・設計から施工・監理まで一連のプロセスは修士学生ら主体で進められた。限られた予算の中で、床の補強やトイレの増設、壁の撤去や指導員コーナーの領域化、個人ロッカーやベンチ下収納など基本性能を担保しつつ、子どもたちが居心地よく過ごせるニッチや秘密基地のような隠れ家を実現させるため、工事区分を工務店とDIYに分割した。自ら手を動かすことで、父母の協力が得られたり、関係者の結束力が固められたりしたことは、予算節約以上の効果があったと考えている。



Photo2 子どもたちも参加した地域住民説明

一連の取り組みを経て感じている、学童を育む上でのポイントを挙げるとすれば、以下の3つ。①指導員や子どもたちは皆、与えられた学童環境をたくましく使いこなしており、そこで見出された空間的設えは、学童を計画的にカスタマイズする際の参考になる。②学童にあふれる物品を取捨選択し、学童環境を再整理することで生まれる空間的余白は、子どもたちの新たな居場所になりうる。③ささやかでもワクワクする空間を皆で考え、自らの手でつくり出せる行為は、人とのつながりを強化し、場への愛着を醸成する。

4. 地域防災からの観点

最後に地域防災の観点から有効と思われる事項を以下整理する。

①日常生活の場としての学童を考えるため、学童保育施設周辺の道路、公園、公民館などをフィールドワークした。子どもたちは、日々、学童周辺に広がるさまざまな環境要素を駆使し、地域の一員として日常を過ごしていることを知った。

②新たな学童保育を提案する際、地域環境へ配慮するという受動的思考だけでなく、地域に積極的に貢献していくという能動的思考を加えた。つまり近隣に静かな環境を確保するという設えだけでなく、屋外手洗いや屋外テラス、屋外ベンチ等を地域住民に開放する、地域貢献する機能の導入を検討した。

③竣工後、使い勝手がいいように、施設は少しずつ改変されている。当初からカスタマイズできるよう、壁や柱を多く設定した。父母たちが手作りの連絡袋を吊り下げているなど、自ら手を動かした経験が随所に活かされている。

④学童の子どもたちは、積極的に地域活動に取り組んでいる。学童に隣接する児童公園は定期的に子どもたちが清掃している。一連のワークショップで「まちへのまなざし」を醸成した成果とも言える。

⑤施設前に立つ、学童の子どもたちの存在を知らせるサイン。小さな仕掛けは自分たちで工夫してつくる、地域にその存在を示す。そんな行為を続けていくこと。このプロジェクトがそれらの契機になっている。



Photo3 協働作業により地域との団結力が高まる